大分県現代俳句協会句会報　第23号

令和5年10月20日発行

【令和5年 第1回雑詠句会結果＆第2回雑詠句会選句号】

第一回雑詠句会結果発表（選句＆選評）

31点　賛成も反対もせず咳一つ　佐藤　律子

23点　一つ知り一つ忘れて大根煮る　岸本千鶴子

19点　青空の句点となりて木守柿　宮川三保子

18点　朝顔に父の無口が咲いている　河野　輝暉

16点　コート脱ぐようにこの世を脱ぎ捨てる　足立　攝

16点　ポケットは混み合ってます秋の雲　本田　圭子

16点　寒卵割って方針くつがえる　上田たかし

16点　水仙を手折れば罪のひとつ増え　田代　直之

14点　何もないことの幸せ去年今年　幸谷　恵子

13点　ト書きなく筋書もなく去年今年　福田　英子

13点　梅真白まだまだ村にある浮力　桐野　力

12点　売り言葉買って四方の山笑ふ　吉田　素子

《11点句》

木枯や一歩もひかぬ夫と妻　鎌倉真由美

ひと言の後の沈黙春の雨　足立　町子

天空は北斎ブルー寒の明け　吉田　素子

「ここだけ」の秘密が抜ける枯木立　鎌倉真由美

《10点句》

理由などなくて見ている冬の海　岸本千鶴子

うぬぼれを落して冬の山となる　時松由美子

《9点句》

ため息のようにさまよう春の雪　足立　攝

友がまた風となりゆく芒原　御手洗豊海

冬日向母の背さらに丸くなる　有永真理子

篝火草胸にひとつの火種持つ　宮川三保子

《8点句》

稲刈の高揚解かすしまい風呂　鎌倉真由美

ネクタイの仕方忘るる彼岸かな　佐藤　哲夫

蕗の薹刻めば昭和匂い立つ　稲田久美子

アクセルを踏んでとびこむ春の闇　陣野千恵子

《7点句》

妄想を鏡に写す冬灯　河野　則子

初蝶の移動スーパー連れて来る　岸本千鶴子

恥じらいという遠回り蜆食ぶ　佐藤　珠幸

犬吠ゆる冬満月の爆心地　牧野　桂一

文化の日空回りするドアのノブ　本田　圭子

行く年をふるいにかけて前を向く　田中　充
鼻歌で育てる母の菠薐草　足立　町子
病むことも上手くよりそう返り花　甲斐加代子
靴の泥雪で拭きたる春隣り　山口　雀昭
湯たんぽに母の温もり重ねけり　岡村　君香

《6点句》

朽ちてゆく家にも通る秋の風　小野みち子
落椿と言えども好きな場所がある　赤嶺　広史
精いっぱい燃えて浄土へ冬紅葉　神　慶子
柚子の香を胸にあそばす三十日の湯　平田千代子
トンネルを刳られながら山笑う　赤嶺　広史
よう来たと廃校の庭花吹雪　坂本　一光
脳幹をチューニングして春を待つ　佐藤　珠幸
花柄の杖の歩幅や春の泥　松廣　李子
二人には理由などいらぬフリージア　児玉　利子
差し向かう夫のあご髭お元日　立花眞由美

《5点句》

身中のマグマ鎮める蜆汁　赤嶺　広史
長いながい手紙ください冬薔薇　神　慶子
電子化においてけぼりの雪催い　早澤まり子
ふぐ刺しの箸も痺れる旨さかな　田代　直之
頬なでる風に桃の芽笑い出す　坂本　一光
蕗の薹刻みいいことありそうな　赤嶺　信子
堰に来て膨らむ水や冬ぬくし　佐藤　律子
幸せが前線となる桜の国　坂本　一光
かじかむ手擦ってもなお指の皺　天田　泉美
風花も乗り込んでくる観覧車　佐々木　玉
逢えぬなら蕾のままに寒椿　陣野千恵子
転勤の朝を迎えて蜆汁　衛藤　俊一
春愁をチップスターで紛らわす　赤嶺　信子

《4点句》

コスモスの迷路が楽し園児の背　菅　登貴子
落椿目覚の朝を疑わず　足立　町子
一炊の夢を運びし初雀　甲斐加代子
初春や抽斗にある望郷歌　上田たかし
地を這うて冬たんぽぽの坊がつる　赤峰佐代子
告知され眠れぬ朝に寒卵　岡村　君香
歓声をスマホで撮す冬紅葉　有永真理子
廃校の記念壁画に桜咲く　生野　義晴

第一回雑詠句会作品集（点盛）

1 ③誰も喰わぬ柿の村なり存命す　有村　王志
2 ④誰も喰わぬ数多の柿の歓喜かな　有村　王志
3 ③あの頃を生きたからから風車　有村　王志
4 ②夏の草一雨ごとにまた伸びる　溝部　文夫
5 母と見る白球を追う初夏の空　溝部　文夫
6 ①美しきものは枯野や文化祭　溝部　文夫
7 ①コスモスに優しき母の面影を　井元　扇岳
8 かなかなの声ひと夏を終わりけり　井元　扇岳
9 台風来？筑後百年音楽会　井元　扇岳
10 ⑦妄想を鏡に写す冬灯　河野　則子
11 ③遺伝子が消えてしまった蝉時雨　河野　則子
12 ②噂上手海鼠のように口切らる　河野　則子
13 やむを得ず他人に譲る梅林　衛藤　俊一
14 日向にて鶏めしつまむ梅の里　衛藤　俊一
15 ⑤転勤の朝を迎えて蜆汁　衛藤　俊一
16 ③冬の夜や俳狂馬貞読みふける　永松左世美
17 赤黒き皆既月食のこの夜かな　永松左世美
18 ①松葉掻き黄金はありや落葉掻く　永松左世美
19 喜寿の春亡き父母に感謝する　大神　愛子
20 ①元旦の祈る言葉は家内安全　大神　愛子
21 ①気持ちだけホップステップジャンプ　大神　愛子
22 ①初日記千の実りの空澄みぬ　菅　攝子
23 ②柚子釜の臍に夜風の機嫌かな　菅　攝子
24 ②この先は村を残して紅葉風　菅　攝子
25 ⑲青空の句点となりて木守柿　宮川三保子
26 ①ペンを置き覗く万華鏡夜の秋　宮川三保子
27 ⑨篝火草胸にひとつの火種持つ　宮川三保子
28 ⑱朝顔に父の無口が咲いている　河野　輝暉
29 ③月食は仙骨にあり虫時雨　河野　輝暉
30 ①死にたさや今年漬けたる梅食べて　河野　輝暉
31 ①ボタ山の単線廃れ吸入器　牧野　桂一
32 冬鷗湾一艦に傷みたる　牧野　桂一
33 ③十二月八日の宇佐に特攻機　牧野　桂一
34 ④コスモスの迷路が楽し園児の背　菅　登貴子
35 ②バレリーナ夢を踊りて冬の星　菅　登貴子
36 葱抱え今夜の団らん予想する　菅　登貴子
37 巡行の神輿舁く人拝む人　原田　勝子
38 菊日和サッカー一色明け暮れて　原田　勝子
寒星のすれすれに研ぐ色鉛筆　松廣　李子
喜寿迎うこの元朝に深呼吸　髙橋　玲子
誰も喰わぬ数多の柿の歓喜かな　有村　王志
無理ひとつ聞いてもらいしおでん酒　大森　浩司
戦争を見ていて菜花はみにけり　福田　英子
身の上を問わず語りに雪おんな　神　慶子
初鏡自問の果ての厚化粧　御手洗豊海
冬木の芽風に膨らむ試歩の道　吾　亦　紅
葬ひとつつま先にある冷たさは　立花眞由美

39 ①菊日和御堂に遊びし姉は今　原田　勝子
40 ⑯コート脱ぐようにこの世を脱ぎ捨てる足立　攝
41 ⑨ため息のようにさまよう春の雪　足立　攝
42 ②不確かな十指や春を疑えり　足立　攝
43 ①夕焼けて日の短さを思い知る　加藤　征孝
44 ①冬リンゴ仏壇にあげて増す匂い　加藤　征孝
45 紅葉の落つ深き風にはらはらと　加藤　征孝
46 ⑦初蝶の移動スーパー連れて来る　岸本千鶴子
47 ㉓一つ知り一つ忘れて大根煮る　岸本千鶴子
48 ⑩理由などなくて見ている冬の海　岸本千鶴子
49 ①澄み切って底に妖しき水仙香　林　香澄
50 ①藤麗わしだんまり杉の巻かれおり　林　香澄
51 ①秋深し夢はと聞かれ詰まる喜寿　林　香澄
52 ⑤身中のマグマ鎮める蜆汁　赤嶺　広史
53 ⑥落椿と言えども好きな場所がある　赤嶺　広史
54 ⑥トンネルを刳(えぐ)られながら山笑う　赤嶺　広史
55 ④落椿目覚の朝を疑わず　足立　町子
56 ⑪ひと言の後の沈黙春の雨　足立　町子
57 ⑦鼻歌で育てる母の菠薐草　足立　町子
58 ⑤長いながい手紙ください冬薔薇　神　慶子
59 ⑥精いっぱい燃えて浄土へ冬紅葉　神　慶子
60 ④身の上を問わず語りに雪おんな　神　慶子
61 ④一炊の夢を運びし初雀　甲斐加代子
62 ①自分史の透明となる松の内　甲斐加代子
63 ⑦病むことも上手くよりそう返り花　甲斐加代子
64 遠山を翼広げし村時雨　大森　浩司
65 ④無理ひとつ聞いてもらいしおでん酒　大森　浩司
66 ②一年に一度の主役除夜の鐘　大森　浩司
67 ⑪木枯や一歩もひかぬ夫と妻　鎌倉真由美
68 ⑧稲刈の高揚解(とき)かすしまい風呂　鎌倉真由美
69 ⑪「ここだけ」の秘密が抜ける枯木立　鎌倉真由美
70 冬日向摩崖の仏笑みうかべ　中村　廣光
71 八千草に目見張る至福九重の野　中村　廣光
72 ①池の面の氷菓子のごときモミジかな　中村　廣光
73 ④初春や抽斗にある望郷歌　上田たかし
74 ⑯寒卵割って方針くつがえる　上田たかし
75 ①晩学を閉ざしとざして山眠る　上田たかし
76 ②椿の実裂けて突きだす天狗鼻　時松由美子
77 ②散る紅葉一期一会の樹となりし　時松由美子
78 ⑩うぬぼれを落して冬の山となる　時松由美子
79 ②文化の日ホームはひとり到着音　井上　則子
80 冬うらら期末試験の終りの日　井上　則子
81 中東の冬ＰＫ戦の行方　井上　則子
82 ②こがらしや頑固一徹家守る　御手洗豊海
83 ⑨友がまた風となりゆく芒原　御手洗豊海
84 ④初鏡自問の果ての厚化粧　御手洗豊海
85 ⑯ポケットは混み合ってます秋の雲　本田　圭子
86 ⑦文化の日空回りするドアのノブ　本田　圭子
87 ③いつまでも合わぬ計算秋の蜂　本田　圭子
88 ⑤電子化においてけぼりの雪催い　早澤まり子
89 ②ひたすらに生きた褒美のメロン買う　早澤まり子
90 ①山覚める理不尽通す人数多　早澤まり子
91 ⑭何もないことの幸せ去年今年　幸谷　恵子
92 ②書き初めや太き筆には太き文字　幸谷　恵子
93 ②初夢の母高原に来ておりぬ　幸谷　恵子
94 ②春田道むかし物売りヤミ米も　下司　正昭
95 ②ミサイルの落下そのあと雑煮食う　下司　正昭
96 ②戦せぬ法もつ春の増税論　下司　正昭
97 ④地を這うて冬たんぽぽの坊がつる　赤峰佐代子
98 ③行く年や土下座した日の懐しき　赤峰佐代子
99 ③元朝の新しき箸二人膳　赤峰佐代子
100 冬うらら結婚式の待ち遠しい　小川　良子
101 輪になって炬燵を囲む家族愛　小川　良子
102 節分や年の数程豆をまく　小川　良子
103 旗二本アングル踊る初荷かな　原田　勝子
104 ②書初に八十路入る手も震えがち　原田　勝子
105 女正月四人揃って姉しのぶ　原田　勝子
106 ⑥朽ちてゆく家にも通る秋の風　小野みち子
107 若い日の顔はそのまま木の葉髪　小野みち子
108 ①闊歩できないロングブーツの哀しみ　小野みち子
109 ③福寿草もういいかいと春を呼び　山口　雀昭
110 ②書込みの悲喜こもごもや古暦　山口　雀昭
111 ⑦靴の泥雪で拭きたる春隣り　山口　雀昭
112 ②蓬摘み色と香りを閉じこめる　平田千代子
113 ⑥柚子の香を胸にあそばす二十日(みそか)の湯　平田千代子
114 ①道教え派手ななりして先へ行き　平田千代子
115 思い出の6割の縮図に咲く万両　合田　文美
116 ②寒紅に吐く息染めていざ一歩　合田　文美
117 ①散歩道夕焼けドレスを纏う貝　合田　文美
118 ①早春をピンクに染める君の恋　稲田久美子
119 ②妹のような恋人梅二月　稲田久美子
120 ⑧蕗の薹刻めば昭和匂い立つ　稲田久美子
121 ⑤ふぐ刺しの箸も痺れる旨さかな　田代　直之
122 ⑯水仙を手折れば罪のひとつ増え　田代　直之
123 ③寒月に心の傷を見透かされ　田代　直之
124 ③青とんぼお空の色ににているな　合田英怜奈
125 ①春の色木の中ゆれるすずめかな　合田英怜奈
126 ①モンキチョウふうふ仲良く遊んでる　合田英怜奈
127 ②襟巻を忘れる程の句会かな　安森　範明
128 早起の時間貴重や日脚伸ぶ　安森　範明
129 ①美容師や若さと美貌の帰り花　安森　範明
130 ④告知され眠れぬ朝に寒卵　岡村　君香
131 門松に背中を押され告白す　岡村　君香
132 ⑦湯たんぽに母の温もり重ねけり　岡村　君香
133 ②ハイヒールの女足早二月尽　吉田　素子

134 ⑪天空は北斎ブルー寒の明け　吉田　素子
135 ⑫売り言葉買って四方の山笑ふ　吉田　素子
136 ①義仲寺や蕉翁枯野の夢眠る　谷本　親史
137 結び松皇子に白浜冬日入る　谷本　親史
138 東風恃む菅公染みる都府楼址　谷本　親史
139 ⑬ト書きなく筋書もなく去年今年　福田　英子
140 ④戦争を見ていて菜花はみにけり　福田　英子
141 ①武器供与に賛成の我冬ざるる　福田　英子
142 ②大根の思い出遠い雪の中　加藤　征孝
143 風かえれば雪の深さや春キャベツ　加藤　征孝
144 ②里芋の洗う姿の妻恋うる　加藤　征孝
145 受験生ガンバレシール貼ってより　園田　武子
146 ①覇を競うランナー孤独風二月　園田　武子
147 ③自然薯やフクシは錆びて納屋の隅　園田　武子
148 春昼の人込みに酔う天王寺　佐藤　哲夫
149 ⑧ネクタイの仕方忘るる彼岸かな　佐藤　哲夫
150 ②春光のあふれる窓辺薬待つ　佐藤　哲夫
151 ③冬かもめ今日の釣果をお裾分け　合田　陸翔
152 急ぎ足海猫つれて戻り船　合田　陸翔
153 ②青春の偉人の足跡辿る刻　合田　陸翔
154 ①枇杷の花母が忌日を咲きにけり　吾亦紅
155 ③探梅や迷路のごとき風の道　吾亦紅
156 ④冬木の芽風に膨らむ試歩の道　吾亦紅
157 ⑤頬なでる風に桃の芽笑い出す　坂本　一光
158 ⑤幸せが前線となる桜の国　坂本　一光
159 ⑥よう来たと廃校の庭花吹雪　坂本　一光
160 ③静か夜や体丸めて霜の声　天田　泉美
161 ⑤かじかむ手擦ってもなお指の皺　天田　泉美
162 ①麦の芽の勢いと在(あ)る黒が好き　天田　泉美
163 ②冬晴や神木龍に化すところ　川西　達子
164 ①ブロンズの神馬よく跳ね年新た　川西　達子
165 目深に冬帽虚無僧の尺八　川西　達子
166 ⑤蕗の薹刻みいいことありそうな　赤嶺　信子
167 ③早春の回覧板も小走りで　赤嶺　信子
168 ⑤春愁をチップスターで紛らわす　赤嶺　信子
169 ④歓声をスマホで撮す冬紅葉　有永真理子
170 ⑨冬日向母の背さらに丸くなる　有永真理子
171 ①神鈴をふればどこより雪蛍　有永真理子
172 ⑦恥じらいという遠回り蜆食ぶ　佐藤　珠幸
173 ②粗野なれど無欲なわたし山笑う　佐藤　珠幸
174 ⑥脳幹をチューニングして春を待つ　佐藤　珠幸
175 ③六七日の柚子湯に揺れる父の影　赤峯　友子
176 ③梅硬し手を合わすれば神となる　赤峯　友子
177 石蕗の絮携帯電話のふいに鳴る　赤峯　友子
178 ④廃校の記念壁画に桜咲く　生野　義晴
179 鰊来ると江差の海は春めけり　生野　義晴
180 ②蕗味噌が自慢の老舗の料理長　生野　義晴
181 ③ボタ山は眠り昭和の夢をみる　田中　充
182 ⑦行く年をふるいにかけて前を向く　田中　充
183 ③冬耕の寡黙の背中山気満つ　田中　充
184 ④寒星のすれすれに研ぐ色鉛筆　松廣　李子
185 ①床の間を背筋まさしく寒椿　松廣　李子
186 ⑥花柄の杖の歩幅や春の泥　松廣　李子
187 ⑬梅真白まだまだ村にある浮力　桐野　力
188 迷わずに生きて氷柱の水しぶき　桐野　力
189 ①モッアルトの運命を聴く初御空　桐野　力
190 ③川蝉の漁は一瞬春近し　石橋紀公子
191 ①冬ぬくし猫のじゃれ合う出で湯坂　石橋紀公子
192 ①児の作る餡入り餅の器量良し　石橋紀公子
193 ⑤堰に来て膨らむ水や冬ぬくし　佐藤　律子
194 ㉛賛成も反対もせず咳一つ　佐藤　律子
195 ①大根干す早朝だけの銀世界　佐藤　律子
196 ⑦犬吠ゆる冬満月の爆心地　牧野　桂一
197 ②棒で舞ふ一揆の構へ冴返る　牧野　桂一
198 ①青き踏むルルドへ昇る曲り坂　牧野　桂一
199 湯布院の春泥重き句碑めぐり　白土　正江
200 大和三山部屋から望む朝霞　白土　正江
201 ①寒紅の濃き唇をフラワーデモ　佐々木　玉
202 ③枯草や今しばらくは猫かぶり　佐々木　玉
203 ⑤風花も乗り込んでくる観覧車　佐々木　玉
204 ①湯の町の丸みをおびたうかれ猫　佐々木　玉
205 ハグだけで終わる再会花辛夷　陣野千恵子
206 ⑤逢えぬなら蕾のままに寒椿　陣野千恵子
207 ⑧アクセルを踏んでとびこむ春の闇　陣野千恵子
208 ④喜寿迎うこの元朝に深呼吸　髙橋　玲子
209 ②はんなりとわが身にまとう春の雪　髙橋　玲子
210 ③うららけし一と日を独り寺めぐり　髙橋　玲子
211 はちみつに漬けられた梅味見する　児玉　利子
212 ②椿咲く世の変遷にかかわらず　児玉　利子
213 ⑥二人には理由(わけ)などいらぬフリージア　児玉　利子
214 ⑥差し向かう夫のあご髭お元日　立花眞由美
215 ④葬ひとつつま先にある冷たさは　立花眞由美
216 ①春を待つ想い種播き終えてより　立花眞由美

自薦作品募集

※自薦作品を募集します。一人四句。協会未発表のものなら何でも可。なるべく当季。
※年間一句賞の対象になります。
※締切は十一月十三日（月）消印有効。
※同封のＦＡＸ用紙、郵送やメールなど、形式にはこだわりません。送り先は事務局。
※年間一句賞は次回総会で表彰するとともに会報１３１号で紹介します。

第一回雑詠句会選&選評◆順不同◆

小川　良子　選

≪34・47・79・111・112・130・149・170・194・207≫

194　賛成も反対もせず咳一つ　（佐藤　律子）

主人公のがんこさが出ていておもしろいと思い頂きました。

菅　攝子　選

≪11・28・46・56・57・73・116・119・124・151≫

菅　登貴子　選

≪22・24・25・85・116・117・124・126・151・213≫

213　二人には理由などいらぬフリージア　（児玉　利子）

この世の中に、思いやりと優しさ以外に何が必要だろうかと思う。お互いを思いやる心の美しさに感動する。この句の素直さに、自分は相手を傷つけてはいないだろうか？ 行動、ことば、態度。最近はそういうことが薄れてきているような気がしてならない。

牧野　桂一　選

≪40・47・48・56・74・91・135・147・166・193≫

47　一つ知り一つ忘れて大根煮る　（岸本千鶴子）

「一つ知り一つ忘れて」というのは人生そのものを最も具体的に分かりやすく表現している。「死にたれば人来て大根煮きはじむ」という下村槐太の句をまっさきに思い出したが、「大根」というのはまた、人の人生そのものを実によく象徴している。この大根でこの一句は、普遍的価値を生み出している。

自分にとって都合のいいことも悪いことも大根と同じような人生の深い味を私たちに教えてくれているようだ。

吾　亦　紅　選

≪25・40・41・84・86・91・155・156・169・194≫

91　何もないことの幸せ去年今年　（幸谷　恵子）

人間年を取りすぎると、何事につけ面倒臭くなって来る。何事もないのが・・・・。

下司　正昭　選

≪24・58・62・91・139・141・155・172・187・201≫

187　梅真白まだまだ村にある浮力　（桐野　　力）

今地方自治体は一部を除いて少子高齢化による人口減によって財政運営に苦労している。この句の村はまだ浮力があるという。どこの村だろうか興味を持った。小生の住む市は執行部と議会が将来の起債償還を考えずに箱物を三つも建てた結果経営収支の赤字をまねいたのである。その結果、議員１０％職員平均５％の給料減額を強いられている。最も議員の方は六月議会で１０％から５％にお手盛で議決可決している。随分勝手なものである。

岡野　紘宣　選

≪25・52・68・142・157・167・181・190・194・202≫

山口　雀昭　選

≪28・47・54・67・91・135・170・172・178・208≫

170　冬日向母の背さらに丸くなる　（有永真理子）

冬の寒い日の一日、今日は太陽が照り冬日向の中母親が縁側だろうか日向ぼっこをしている。常でさえ背中の丸い母親が前かがみになっているので更に丸くみえる。

小生も雪中に住んでいるのでその暖景がよくわかるすばらしい句である。作者への母親思いのこの一句に心うたれました。

大神　愛子　選

≪39・44・67・91・104・132・144・156・161・180≫

44　冬リンゴ仏壇にあげて増す匂い　（加藤　征孝）

仏だんに供えたリンゴ。日が経つほどに香り漂いその後召し上がったのかな。私もよく同じ体験で、大好きな一句です。

宮川三保子　選

≪28・47・59・63・111・113・139・187・194・196≫

59　精一杯燃えて浄土へ冬紅葉　（神　　慶子）

人生百年時代と言われている現在です。悔いのない日を作っていこうとの思いで毎日を精一杯生きていくと言う気概が感じられました。

比喩として表現されている印象をもちました。秋には真っ赤に紅葉して人々を楽しませてくれ

ます。冬になってあたりが枯れ色になっても、その中にあって一層鮮やかさをます冬紅葉です。紅葉を通して幸せな人生を精いっぱい送り浄土へとの気持が深く心に残りました。

坂本　一光　選

《2・28・40・48・59・91・106・127・139・194》

2　誰も喰わぬ数多の柿の歓喜かな　（有村　王志）

人が住んでいても、住んでいなければなおさらだが、庭の柿の木が数多実を付け、やがて熟し落ちてゆく光景を見て、「こんなことはなかった、少し前までは」と思ったのは数十年も前である。

毎年くり返す光景を見るたび、人間の勝手次第のもったいない無礼なことよと思ってきた。しかし作者の目は違う。この光景を、喰わぬ人間の勝手など知ったことか、ごらん、柿が歓喜の歌をうたっていると詠む。人間の勝手で自然を見るなと、痛く教えられた。

足立　攝　選

《23・26・29・56・83・147・158・168・172・213・214》

214　差し向かう夫のあご髭お元日　（立花眞由美）

「お元日」と元日をナナメに見ているのがおもしろい。長く夫婦を続けていても、改めて差し向かいであいさつする機会はそれほどないだろう。その少ない機会の一つが元日である。よそ行きの顔と声で「今年もよろしく」と頭を下げながら、ふと夫のあご髭が目にとまった。きちんと手入れをしたあご髭なら最近の流行なのだが、無精髭なのか、本気で整えようとしているのか、そのあたりが不明である。こんなに近い距離にいるのに、そんなことも知らないなんて、とおかしくなった私である。

早澤まり子　選

《48・82・83・91・111・149・159・178・186・209・214・216》

111　靴の泥雪で拭きたる春隣り　（山口　雀昭）

句を読んで、思わずクスッと笑みました。雪国生活の思い出がよみがえりました。車道は雪溶けでぬかるんで、靴が汚れ、道路の両側の雪で拭きとった記憶があります。今、世界のあちこちの戦争も拭きとるわけには、いかないものかと、なつかしい思い出だけに残念に思います。春が来ることを祈る作者の心と思います。

安田　文　選

《48・63・74・90・91・170・182・183・194・210》

有村　王志　選

《28・40・41・48・58・74・85・140・173・194》

58　長いながい手紙ください冬薔薇　（神　慶子）

今日まで多くの作品を読み、選句もした中で、掲句に出合って今回は他にも佳吟のあるなか触手が動いた。口語俳句だが、しっかりとした作者の立ち位置を覚えると同時に始めてであった新鮮さを覚える。この「長いながい」というリフレインには視点をしっかりと定めた作者の強い意志が込められている。作者の胸内は知る余地はないけれども冬薔薇の配置、長い人生を経てきた者の足跡というか無言の独白というか沈黙の効果があって、ぐっと心を抉られるようでもあり魅かれる。

吉田　素子　選

《40・54・59・74・120・122・149・163・194・202》

122　水仙を手折れば罪のひとつ増え　（田代　直之）

きれいに咲いてくれている水仙を手折る時の罪悪感、作者の優しいお気持が伺えます。そういえば私もこれ迄どれほど多くの罪を重ねて来た事か。罪を犯さねば生きていけない人間の哀しさに共感します。

原田　勝子　選

《21・28・59・76・77・85・113・130・153・161》

福田　英子　選

《25・27・54・65・74・86・134・187・193・194》

佐瀬　隆義　選

《28・40・58・73・74・84・95・139・184・194》

184　寒星のすれすれに研ぐ色鉛筆　（松廣　李子）

天体と個の営みと、発想の妙味に魅かれました。寒星のすれすれに研ぐとは何ぞや。このシュールさにポエムを感じました。凍てた刃もののシャープな切れ味、色えんぴつの匂いまでする。作者はきっと素敵な絵を描かれるでしょう。「すれすれに研ぐ」はインスピレーションの賜物でしょう。言葉や文法が不意に出てくる脳のふしぎ。このだいご味があるから俳句は生涯つづく。

内田トシ子　選

《2・18・47・63・78・123・134・204・206・210》

河野　輝暉　選

《1・6・12・48・54・73・88・149・167・176》

176　梅硬し手を合わすれば神となる　（赤峯　友子）

句意が難渋であり、現代俳句に、神、のお出ましはタブーの如く避けられている。故にこの句に惹かれた。「神となる」主語は梅なのか作者なのか。一木一草に八百万の神性を認めるアニミズムの象徴として梅の有難さに合掌したのであろう。一方、神とは人の信仰無くしては成立しない。鎌倉幕府の「貞永式目」には「神は人の敬によりて威を増し」がある。とすれば梅を拝む事により作者が神性を帯びた事にもなる。平明な表現中の重層性。

河野　則子　選

《29・47・61・74・85・122・149・172・193・194》

194　賛成も反対もせず咳一つ　（佐藤　律子）

この句について「咳をしても一人　放哉」を思い出した。人に伝える手段として、言葉だけでなく、「咳」を代替させたところに俳味がある。俳句では沈黙も言葉の内、否、言った以上に雄弁にさえなる。

この「咳」は賛成か反対か或いは中立の立場を表わしたものか。読者の想像をかきたて、ユーモアさえ漂わせている。

神　慶子　選

《2・25・28・61・86・108・175・187・194・207》

桐野　力　選

《3・16・55・78・85・135・166・184・194・207》

3　あの頃を生きたからから風車　（有村　王志）

不思議なリズム感。読者の想像力を触発するような。

小野みち子　選

《10・28・41・49・74・86・122・157・172・194》

藤　万葉　選

《53・74・83・85・93・95・97・109・156・196》

196　犬吠ゆる冬満月の爆心地　（牧野　桂一）

戦争は原爆が投下された八月だけの事ではない。今もウクライナは戦禍の中にあり厳冬も猛暑も満月が照らす夜でさえ戦闘が止む事はない。私たちは平和を音楽で小説で時に俳句にして叫ぶ。冬満月の爆心地、犬もまた人の愚かさに吠えているのだろうか。それは作者自身の姿なのかもしれない。平和への思いの込もる秀句だと思います。

髙倉　直人　選

《15・27・47・69・78・106・122・135・173・186》

15　転勤の朝を迎えて蜆汁　（衛藤　俊一）

今日から今までと違う職場に勤務するその朝に、一抹の不安を抱えながらも心機一転新たな決意で臨もうとしている情景が見えてくる。蜆汁の香りも気持を新たにしてくれる。

平田千代子　選

《4・47・60・61・91・106・114・125・157・198》

赤嶺　広史　選

《27・55・68・78・85・122・134・158・186・203》

立花眞由美　選

《10・11・27・55・56・67・160・187・194・196》

11　遺伝子が消えてしまった蝉時雨　（河野　則子）

国連が「地球は温暖化から沸騰化へ」と警告した。動植物の遺伝子は変換されていて生態系は確実に変化している。ここ二～三年蝉の鳴き声が少なく弱い。作者はここを危惧しているのであろう。「沸騰する地球」とは何とぞ、私たちは子孫に済まなく思わなくてはいけない。地球規模の問題を身近な「蝉時雨」から捉えて詠んでいることに敬服する。

永松左世美　選

《67・69・74・120・122・133・170・187・203・207》

187　梅真白まだまだ村にある浮力　（桐野　力）

過疎の村はどうしょうもなくわびしいものではありますが、ここに住んで二十有余年、すてがたい力もあると感じます。

町の人が、空気がおいしい、野菜が新鮮と生きがいを感じる人もいると思います。そんな力強さをかって選びました。

河野　洋子　選

≪15・69・74・76・111・169・196・203・207・214≫

甲斐加代子　選

≪1・11・28・69・77・86・99・135・168・182≫

182　行く年をふるいにかけて前を向く
（田中　充）

残された人生を悔いなく送ること。永い人生は山あり谷あり、悲喜こもごもは私だけではないと思います。新しい年を迎えるに当たり、行く道にはどんな障害物が待っているやも知れません。だから、その為にもろもろの事をふるいにかけて選択して生きようとする、前向きな姿勢に心打たれました。可能な限り、そうしたいものです。

本田　圭子　選

≪25・27・41・56・68・69・91・106・122・139≫

赤嶺　信子　選

≪15・25・31・46・68・132・134・194・209・213≫

山本　悦子　選

≪25・40・60・74・84・155・168・187・191・197≫

松廣　李子　選

≪3・47・53・67・85・134・139・160・168・169≫

85　ポケットは混み合ってます秋の雲
（本田　圭子）

上五中七の「ポケットは混み合ってます」、混み合ってるものは里山を吟行した仲間との弾んだ会話でしょうか、子供の頃の記憶を辿り拾ったどんぐりや鮮やかな紅葉でしょうか。季語が秋の草花や紅葉・どんぐりではなく、澄み切った空に白くくっきりと浮かぶ秋の雲、いろいろな雲の形があり読む人の想像が拡がります。私もポケットの中はいっぱいです。日中の暑さは残っていますが空に目をうつすと秋の雲が！！ほっと癒される句でした。

御手洗豊海　選

≪25・35・47・56・74・78・120・159・166・194≫

194　賛成も反対もせず咳一つ
（佐藤　律子）

会議等で出席者の意見を求めると、必ず意見を述べる一言居士といわれる人がいます。そんな人物が意見を述べずに咳をした場面を思い出します。こんなこともあったと思い出され、その場の空気を表現したおもしろい句だと思います。

上田たかし　選

≪10・28・40・68・69・78・85・134・168・182≫

182　行く年をふるいにかけて前を向く
（田中　充）

今年一年の生活をふりかえり、その一つ、ひとつについて、いろんな角度から、内容を検討している様子が分りやすく表現されている。穀物の選別に使用する篩のように、厳しい反省が土台となっている。自分の望んでいる境地に達する過程を、着実に実行するため、「前をむく」との意志の強さに共感する。

佐藤　優美　選

≪25・60・72・83・122・135・147・174・190・195≫

122　水仙を手折れば罪のひとつ増え
（田代　直之）

色々、様々な罪を犯してきた自分。大きな罪も小さな罪もある。水仙は他家の庭に咲いていたのであろう。あまりの可憐さに手折って手にもった。この些細な行為もまた罪として感じる作者の自省も私と相通じるものがある。人は皆罪深いものであるが自覚ある人と、無い人の相違は大である。

佐藤　次江　選

≪25・48・53・56・122・144・160・161・186・192≫

48　理由などなくて見ている冬の海
（岸本千鶴子）

青春時代を、海の近くで過ごしました。辛い時、海を見ながら「この海は九州の古里につながっているのだなぁ」とボンヤリしていました。自分の体験から共感できたので選びました。

田代　直之　選

≪25・28・47・56・74・83・85・170・194・196≫

194　賛成も反対もせず咳一つ
（佐藤　律子）

この句を読んで昔、何かの本に書いていたイエスとノーの関係を思い出した。①「イエスである」②「ノーである」③イエスでもノーでもない　④「イエスであるがノーではない」確かこんな件があった。この４項目の中で作者の心境は③に近いのではないだろうか。問題は「咳一つ」に何が隠されているかである。何か言い

たいことがあるのではと推測されるが言わない部分を読み手に任せることでこの句に深みや奥行きが感じられ、味わい深い句になっていると思います。

森山　秀子　選

≪10・25・40・52・57・59・88・130・133・206≫

岡村　君香　選

≪10・41・47・68・83・120・121・123・194・213≫

213　二人には理由などいらぬフリージア
（児玉　利子）

この二人は恋人同士なのか親友なのか……きっと恋人同士で久しぶりに会うことができたのだと想像します。話したいことが沢山あるのに何から話せばいいのか……。そこには黄色のフリージアが咲いていて、甘酸っぱい香が漂ってきそうな素敵な情景を妄想しました。

足立　町子　選

≪40・48・54・68・134・135・170・174・194・207・214≫

174　脳幹をチューニングして春を待つ
（佐藤　珠幸）

日本人の待春への思いは強い。日脚が伸びたと感じると、老いも若きもみな来たるべき春に向けてせっせと準備を始める。出かけるための春着も必要、ウオーキングも再開しなくては…と心が躍る。

しかしこの作品は視点が少し違う。春をより楽しく過ごすためにはまず脳幹を調整して感受性をＭＡＸにしておこうと言うのだ。自分の脳を機械のように捉えたところがおもしろい。

菅　勲　選

≪28・53・91・93・111・122・124・132・151・166≫

151　冬かもめ今日の釣果をお裾分け
（合田　陸翔）

今は、釣ブームと言われています。自分がよければとの世界観がありますが、釣った魚をかもめにお裾分けする、他者への思いやり、心の広さを感じさせる句と思いました。

安森　範明　選

≪34・41・56・122・130・149・170・193・203・214≫

203　風花も乗り込んでくる観覧車
（佐々木　玉）

一見してわかりやすく情況が浮かんでくる。想像ではなく、実体験であろう。情緒があり好きな句です。

時松由美子　選

≪57・63・85・91・97・99・121・169・170・182≫

髙橋　玲子　選

≪28・47・78・83・113・122・158・175・194・212≫

28　朝顔に父の無口が咲いている
（河野　輝暉）

俳句に出合って喜びや苦しみを味わう今日、二一六句の作品に良し悪しは別として○×△を未熟な自身の感性で選句させて頂いた。

その結果として心情俳句が多い事に驚いた。選句をすることの発見も頂いたと思っている。さてこの作品であるが、朝顔と父、という身近な取合せの視点が良い。中七下五の表現に父の確かな実像が読む側にも想像出来るし、また奥深さを感じました。

園田　武子　選

≪29・52・59・60・67・85・119・184・206・215≫

川西　達子　選

≪47・58・91・113・120・154・176・206・208・213≫

120　蕗の薹刻めば昭和匂い立つ
（稲田久美子）

こどもの頃、近くの畑の側や、わりと身近なところに蕗の薹はあった気がする、が若い頃それを料理した覚えがない。年をとって蕗の薹を見つけると宝物でも見つけたようにうれしい。

「昭和が匂い立つ」に昭和も遠くなり蕗の薹と共になつかしい。

掲句から香りが立ち上がってくるようです。

谷本　親史　選

≪2・15・25・27・94・178・181・185・197・203≫

181　ボタ山は眠り昭和の夢を見る
（田中　充）

「ボタ山」は選炭後の粗悪な岩石を円錐状に積み上げた山。旧炭鉱の景色。かつて九州では筑豊や三池炭田が有名でした。炭鉱には工業が起こり、人が集い、文化が栄えます。過ぎ去った昭和への郷愁です。

夢の裏にはエネルギーの変遷が隠れます。幕府の天領基盤は経済。薪、木炭の森林です。それが電力、石炭、石油や天然ガスと移り、今や核燃料にも及ぶ現実の世界があります。

季題「山眠る」の秀句を頂きました。

幸谷　恵子　選

≪16・46・56・61・83・85・135・183・207・215≫

46　初蝶の移動スーパー連れて来る　（岸本千鶴子）

店など無い集落に暮らす作者は、冬の寒さにじっと耐えて生活していたのでしょう。長い冬の終わるある日、初蝶を見かけ春の訪れを実感されたのでしょう。その日は移動スーパーも来ていたと言う、春の喜びに溢れた作者の心が伝わってきました。

有永真理子　選

≪25・47・69・79・135・158・182・186・187・208≫

25　青空の句点となりて木守柿　（宮川三保子）

冬の青空が広がる山里に一本の木守柿、句そのままの景があざやかに浮かびます。また、なつかしさを想起させる句でもあります。

中七の「句点となりて」は言葉どおりの青空の赤き一点でもあるし、今年の実りの感謝と来年の実りを祈る句点でもあるのでしょう。すがすがしい作品です。

生野　義晴　選

≪25・34・57・89・129・132・139・146・171・187≫

132　湯たんぽに母の温もり重ねけり　（岡村　君香）

幼い頃、冷たい布団で寝ることを苦痛に感じていました。駄駄をこねる自分に優しい母が就寝前には必ず湯たんぽを抱かえてくる姿が、今でも目に浮かぶように蘇ってきます。

母は口答えしても文句を言っても大きな心で接してくれ、童謡等を歌って元気づけてくれました。作者にも母の存在と愛情に包まれて、苦しい時、辛い時、悲しい時にも耐え抜いた思い出を幾つも刻まれたのだと思います。

母への感謝が伝わってくる名句です。

赤峯　友子　選

≪27・40・57・69・120・122・123・158・163・187≫

158　幸せが前線となる桜の国　（坂本　一光）

日本人は本当に桜が好きである。パッと咲き、パッと散る潔さが日本人の心をとらえてやまない。毎年春になると桜の開花が話題となる。待ちに待った開花が宣言されると、皆こぞって桜を愛でる。幸せが前線となるのである。桜の国日本を実感する句である。

佐藤　哲夫　選

≪28・30・83・94・96・121・122・159・193・194≫

159　よう来たと廃校の庭花吹雪　（坂本　一光）

私は田舎の中学校の卒業で早く廃校となりました。振り返れば花吹雪よう来たと瞬時ではあるが庭のあでやかさ生徒愛の賑やかさをその都度喜んでいる事と思っております。

加藤　征孝　選

≪3・40・67・78・82・121・157・159・161・194≫

28　※朝顔に父の無口が咲いている　（河野　輝暉）

あれから、もう何十年の昔のこと、私もまだ独身だった。父と二人暮しと云う中で私は、帰って来て牛を飼うことに決めた。所が思うようにいかなかった。無理もない。父と年令が離れているのだから、それでいて、土地も放れていた関係もあって、結局は廃業せざるをえなくなった。あれから何十年。父も他界して今現在となる。子供２人大人になった。現在となるが一人暮らしの私だが、何かにつけて、父のことを思い出す。（※選外）

竹尾きくみ　選

≪15・47・48・67・84・98・104・106・186・190≫

鎌倉真由美　選

≪42・47・52・78・86・87・88・134・139・194≫

47　一つ知り一つ忘れて大根煮る　（岸本千鶴子）

今どきの事は、知ってもすぐに忘れてしまう。「この前教えたじゃない」子供に言われ、シュンと小さくなる。しかし、煮物の味つけは気張らずに、呼吸をするように上手に出来る。子供達よ、これは敵うまい。静かに老いていく日常が、過不足なく表現されていると思いました。

天田　泉美　選

≪23・40・47・57・73・132・172・181・206・208≫

47　一つ知り一つ忘れて大根煮る　（岸本千鶴子）

「一つ知り一つ忘れて」とは、私の日常でもあるなあと共感です。元気に歳を重ねながら穏やかに過ぎてゆく毎日の本当に普通の日常がいいですね。一人暮らしの私も、元気で穏やかな日常に感謝の毎日です。

佐々木　玉　選

≪10・41・63・65・87・88・174・182・187・194≫

174　脳幹をチューニングして春を待つ

（佐藤　珠幸）

生命を維持していくのに重要な脳幹を調整するという発想が素晴らしい。「春を待つ」の季語とぴったりです。

丘　友子　選

≪1・28・47・51・52・68・98・150・194・207≫

田原　夏子　選

≪20・28・66・85・98・111・121・166・194・210≫

井上　則子　選

≪25・42・47・54・69・135・139・140・187・194≫

140　戦争を見ていて菜花はみにけり

（福田　英子）

湾岸戦争からか、爆撃の様子をライブで観ながら、普段通りに食事をして、普段通りに布団に入る。　あの空の下で数多の命が失われていることが頭をよぎりながら。

そして、菜の花畑の空は青……。

吉光　好美　選

≪40・41・53・67・85・87・89・134・139・182≫

林　香澄　選

≪12・28・40・47・67・86・140・172・214・215≫

215　葬ひとつつま先にある冷たさは

（立花眞由美）

葬儀と黒靴のつま先の取合せが大発見でした。下五の「は」が、深く読後感を拡げてくれました。そして、黒ストッキングのつま先は、本当に冷たいのです。

石橋紀公子　選

≪25・41・57・65・85・120・132・156・176・178≫

156　冬木の芽風に膨らむ試歩の道

（吾　亦　紅）

療養先の病院の庭先であろうか。足ならしに、ゆっくり歩く作者が、ふっと見上げた木々に、確かにふくらんでいる木の芽を発見した。

自身の病後の春を、冬木の芽と重ね、感慨深く詠んだものと思う。「春はもうそこまで来ている」と実感した作者のうれしさが、句全体から伝わってきました。良い句と思います。

佐藤　律子　選

≪33・47・48・56・58・69・92・96・111・196≫

96　戦せぬ法もつ春の増税論

（下司　正昭）

今世界中の関心事、連日どこかの国の戦争報道。戦せぬ法を持つ日本、税もまた国民の関心事。リズムも良く下五との取り合せが読む者の共感を呼びます。

田中　充　選

≪27・35・55・69・132・136・139・164・196・212≫

136　義仲寺や蕉翁枯野の夢眠る

（谷本　親史）

芭蕉は弟子のいさかいを仲裁するため大坂に出向き、病を得てこの地で没した。遺言に従って義仲寺にある木曽義仲の墓所の横に葬られた。枯野の句は死の四日前に詠まれた。作句後に支考を枕頭に呼び、中七・下五を代案の「なをかけ廻る夢心」とする是非について相談している。この句には「病中吟」と前書があり、病を治してこれからもまた俳諧の旅を続けようと考えていた。芭蕉に対する作者の尊敬と憧憬の念が伝わる一句である。

志賀　文子　選

≪4・43・66・91・99・109・150・153・159・183≫

91　何もないことの幸せ去年今年

（幸谷　恵子）

年を重ね、一日一日過ぎて月日がたち、便りのない事が無事の証しと思う幸せ、穏やかに暮らせる事を願う毎日。

赤峰佐代子　選

≪10・46・63・88・110・139・174・187・194・215≫

福井トミ子　選

≪33・34・50・75・92・110・112・120・170・184≫

92　書初めや太き筆には太き文字

（幸谷　恵子）

書初めや太き筆には太き文字。此の句を眼にした時に、子供達の書初め大会の様子が、目の前にに生き生きとした筆使いで、真剣な眼差しと、あの雰囲気は私は大好きです。私はあの世界大戦中に育ち、筆もなく紙もなく、本当に淋しい残念な時代に育ちました。

太き筆には太き文字を書いて見たかった。これからも戦争は絶対駄目、駄目です。　昭和五年七月生、九十三才

児玉　利子　選

《33・40・97・113・134・140・142・159・180・189》

白土　正江　選

《46・63・78・97・106・127・134・162・175・202》

134　天空は北斎ブルー寒の明

（吉田　素子）

まだまだ寒いと思っていたら、もう寒明である。窓をあけて空を見ると、青がとてもピンとはりつめて美しい。

前に美術館で北斎の富嶽三十六景を見たが、まるであの時のように迫ってくるようだ。これが北斎ブルーの力というものなのか。

まだしばらくは寒い日が続くだろうが、今日はよい一日になりそうだ。

えんど久子　選

《27・47・53・65・74・113・135・149・161・194》

113　柚子の香を胸にあそばす三十日の湯

（平田千代子）

柚子湯の句はよくあり、平凡になりがちだと思いますが、中七がプカプカゆらゆらしている柚子の様子とそのよい香りを思い起こさせ、上手だと思って選びました。

作者のこの一年はおだやかなよい年だったのだろう、新年も柚子の香を胸にあそばせる気もちのゆとりを持てるよい年にと願っているのだろう、と思いをはせました。

忙しく大変な一年だったなら、それをねぎらってくれた柚子湯。それもまた素敵ですね。

原　春蘭　選

《7・16・46・67・74・109・118・122・167・174》

174　脳幹をチューニングして春を待つ

（佐藤　珠幸）

脳幹をチューニングするという表現が斬新かつ新鮮でした。脳幹を楽器に見立てそれをやがて来る春を待ちつつ一番いい状態に保つよう調律・調整する。作者のいかにワクワク春を待ちわびているかの思いがあふれでていてほっこりします。脳幹とチューニングという、あまり縁のない2つの言葉のとり合わせ使い方が絶妙に感じました。

陣野千恵子　選

《25・46・122・135・139・149・157・174・194・213》

46　初蝶の移動スーパー連れて来る

（岸本千鶴子）

長かった寒い冬。本当に…春になるのだろうかと気に病んでいたら、初蝶がひらひらと目に飛びこんできた。そんな情景でしょうか。初蝶という言葉に、輝くような幸せのモンキチョウが浮かびます。また移動スーパー連れてくるという中七、下五に軽やかさが溢れていて、スピーカーの声まで聞こえてきそうです。明るくて楽しい俳句で、春が来たことの喜びについ鼻歌が出てきそうで、大好きです。

※作品番号は、編集部で作者順に変換しました。

※今回のゲスト選者は以下の方々です。

・佐瀬　隆義　様（「石」時代からの俳人）
・佐藤　優美　様（津留句会）
・山本　悦子　様（「天籟通信」編集長）
・田原　夏子　様（故田原千暉氏の奥さま）
・丘　友子　様（故田原千暉氏のご長女）

令和五年　第2回雑詠句会　選句用作品集

1ざわざわと久住の山のススキ揺れ
2名月や地球の石は水の花
3ひまわりの鬱戦争が終らない
4稲の花撫でて引き抜く検見役
5君の名は浜昼顔に聞いてみる
6二百十日傾いて立つ弥次郎兵衛
7鰯雲只今避難訓練中
8稲を刈るたびに小さくなる故郷
9緑陰の増して聴こゆるラジオかな
10鬼灯を鳴らした昭和懐かしむ
11秋刀魚焼く男涙の美しき
12着崩れを闇にあずけて踊りけり
13腕をくみ鰤起しまつ漁師小屋
14いつもより母がやさしい野分けの夜
15会いたくて来たよここまで曼珠沙華
16奥畑の案山子倒るる誤算の夜
17白魚漁ほつほつ岸を人ゆけり
18久方のチキリンコンや夕祇園
19なきがらの鼻につめもの酷暑かな
20雲間にてそっと紅ひく良夜かな

21 すかんぽを噛めばよろめいても少年
22 法被干し一晩寝れば夏祭り
23 八月の空未来と自分変えられる
24 無花果よ庭に小さきエデンあり
25 こだわりは意味のなきもの根無草
26 ポプラ打つアカゲラリズム秋深む
27 早春の音が地面で動きたる
28 だしぬけに萌ゆ曼珠沙華かの恋も
29 零余子めしお代り三杯笑む母よ
30 引き算の余生抱えて秋深む
31 かわたれの案山子魔性を潜ませる
32 千の風受けて枯野はさわぎだし
33 父の手の温もり今に七五三
34 甲子園若人の夏フルスイング
35 暗誦は一行だけの法師蝉
36 石仏がそろりと動く春の宵
37 これでもかこれはどうだと揚花火
38 蜩へ時を忘れてトロイメライ
39 断捨離や父の背負いし草刈機
40 電柱にのうぜんかずらの登り龍
41 牛の瞳に流れゆく街秋の暮
42 一番じゃなくてもいいよ月の道
43 孫の夏極楽みたる馬来西亜（マレーシア）
44 太陽を閉じこめているトマトかな
45 一筆の秋雲かかる阿蘇の岳
46 でで虫や来世は翅をつけて飛べ
47 秋天へ重いものから捨ててゆく
48 迷いつつ薔薇の剪定深くする
49 真夜中の指の激痛大百足
50 主婦という服を脱ぎ置く夏の果て
51 夏帽子粋に坂道二度ころぶ
52 案山子抜くごくろうさんと口に出し
53 海猫の住む経島（ふみしま）や秋澄めり
54 黄砂ふる地球の吐息か空仰ぐ
55 ふるさとは「メサ」なる山の夏閉まい
56 シャンソンの息吹に惹かれ枯れ葉舞う
57 ありし日の義母との諍い藍浴衣
58 味噌汁やカボス絞りて御代りす
59 横断歩道の路面の粒が蟻のよう
60 敬老日あたりまえと言う贅沢
61 ふり返るための坂道葛の花
62 白と黄の揚羽離れず勘当よ
63 柿五切小鹿田皿にて句座の卓
64 常夜灯夢にめざめて虫の鳴く
65 二重虹明日は良き事予感せり
66 食べごろを逃れしオクラ天を突く
67 晩節の重み千鈞胡桃割る
68 額紫陽花四人五人と足を止め
69 人生の余白を活かす後の月
70 四年ぶり集会場の敬老会
71 上弦の月をデコピンする妻よ
72 鬼灯を鳴らす子の背に茜雲
73 湯煙を懐にして山眠る
74 稲刈はお国の基本日本晴れ
75 簑を着て案山子踊れば雀来る
76 マロングラッセ一粒分の秋の恋
77 秋の夕父母恋し星語る
78 山じゅうが燃えて命が連鎖する
79 桜紅葉紅を尽くして地に還る
80 砂糖きび齧って吐けぬ核の滓（ごみ）
81 南風（みんなみ）の雲の果まで鎮魂歌
82 被弾碑を囲い晩夏の海鳴れり
83 吾亦紅風に色なし寂光土
84 ダム底の町にも祈り暮の秋
85 夏厨強き女のふくらはぎ
86 冷奴酒の肴に丁度良い
87 旅慣れぬ鞄の中の秋扇
88 染みついたあんちゃの匂ひ更衣
89 母の年越え八十の桜東風
90 心配の種がぽろぽろ唐辛子
91 叱咤する風やさしくもありぬくし
92 稲刈のあと静寂とたたかえり
93 味わい深い晩年の貌吊るし柿
94 大空に舞うは一ひら百日紅
95 老猫の膝に脈打つ五月闇
96 稲穂ゆれ乗ってみたいなコロコロと
97 投函の音がひばりになっている
98 初夏やハヤシライスの金婚日
99 二つ三つ四つ南瓜畑で生きる意味
100 残菊や生の余白を埋めるもの
101 ビヤガーデン早く涼しくなりたまえ
102 二度となき雲の形の冬の空
103 春愁をちょっと置き去る喫茶店
104 長き夜や肌うるわしきピアニスト
105 下駄ダンス日田駅前に秋並ぶ
106 飽食に素通りされる山葡萄
107 柿熟し身の混沌を抜け出せず
108 たましいの余韻残していちょう散る
109 秋刀魚焼く天下御免の一軒家
110 稲刈やさっそうと現るコンバイン
111 売れ残るいわしの翳にある汚水
112 菜の花の沖にも鮫がいるのだろうか
113 推敲の二転三転して夜長
114 ぎす鳴くや湯上がりの爪あまく研ぐ
115 彼岸花崩れしままの文化財
116 艶ややかに赤トウガラシの自己主張

117 焼きたてのパンの匂いや風光る
118 カップ麺月を浮かべて完食す
119 盆太鼓四万人の手を揺らす
120 ウオーキング急き立てられて蝉時雨
121 青竹踏朝の背筋や赤トンボ
122 悔しさも生きる力や蝉の爪
123 鬼灯を唇で噛み母を恋ふ
124 葉桜となり目をとじる磨崖仏
125 蜩やホームシックなあの頃を
126 もぎたてのトマト生真面目すぎるのよ
127 福島のこれより先はまだ残暑
128 とりどりの案山子の使命村起こし
129 そこここに転がる青柿の反乱
130 日を返す旧家の壁や梅雨明ける
131 戸締りの手を止め覗く虫の闇
132 あの暑さなんだったのよ彼岸花
133 満月の妖しき中へ老いてゆく
134 初栗を七つ拾いて味見かな
135 夏本番のお祭りも来て語りぐさ
136 穐田やふた月会わぬ子の背丈
137 実ざくろが空の青さへはみ出しぬ
138 虫時雨眼裏に見ゆペンライト
139 新米の光るひと粒つまむ箸
140 陽にまみれ土にまみれし母九月
141 露草の白き朝露ひかりおり
142 日の本を絡めとりおり葛かずら
143 遠会釈交わすたそがれ稲の秋
144 田を守り村を護(まも)りて風薫る
145 みの虫の袋をひとつあけてやる
146 もう見頃すぎたか棚田の彼岸花
147 菊まつり友と笑うの三度目よ
148 三陸のなみだの海に鰯群る
149 すらすらと句を授かりし初夏の夢
150 少子化も円安もある秋日和
151 おにぎりの数だけほしい秋日和
152 なき夫と今宵の月を酌み交わす
153 休耕田畦に彼岸花目に映る
154 山笑い山燃えやがて山眠る
155 銀河澄む骨の崩れる音がする
156 ドローンで覗かれ兵は未黒野に
157 爆音はＤＮＡまで終戦忌
158 お終いは猿の反省休暇明け
159 わらべ歌消してはびこる赤のまま
160 稲刈を終えていずこもがらんどう
161 秋屋台人それぞれの顔をして
162 一墓石取り囲むよに曼珠沙華
163 夕顔や父の忌こもる日の匂い
164 茄子馬の脚が背に抜け盆終る
165 悲しみは秋潮にのせ又雨に
166 村じゅうの夕日集めて稲を刈る
167 もやもやも弾き飛ばして鳳仙花
168 老年の素肌に痛き秋日和
169 米をとぐ朝方雪が積もるらしい
170 さわさわと蔵に音させ竹の秋
171 逃げ果(おお)すか戦温暖化雹穿つ
172 三日月や乙女の顔に匂い立ち
173 妻は知らずところてんとは涙いろ
174 コップ割れし音に傷つく春の風
175 八月十五日星野富弘の詩
176 しぐるるや点滴液のぽつぽつと
177 鯖寿司を買って上りの七号車
178 短日や苦労もありて日を暮らす
179 四つ角を曲がれば立夏来ておりぬ
180 冬近し薪を割る音透きとおる
181 バイオリン独奏会はキリギリス
182 ゆく秋の三歩先行く記憶力
183 煩悩の色美しき柿落葉
184 生き死にを問うな荒野の冬の蝶
185 酔芙蓉決断にぶる選句かな
186 無精者きたきりすずめに秋が来た
187 名月や風は語部岡城址
188 ひとことを言えないままに冬の薔薇
189 星月夜何か語れよ逝きし友
190 草の花けふも誰とも会わぬまま
191 秋麗やキャンセル待ちのバス旅行
192 戸締りの手を止め仰ぐ月夜かな
193 古書店の店主を覗く初燕
194 古妻や小言戯言法師蝉
195 芙蓉咲き高き竜の声を待つ
196 玄関に朝顔置きて客を待つ
197 吾亦紅地味なあの娘は紅をさす
198 独り居にいつしか友となる金魚
199 長電話遠くで同じ月をみて
200 ひとしきり咲いて静かな薔薇でいる
201 ＡＩの指示に動く防災の日
202 虫の音を海馬におさめ夜化粧
203 逝く空を毀さぬように青栗蹴る
204 耳のない案山子に届く子らの声
205 有料の空へはじける大花火
206 鶴折りても折りても足りぬ八月よ
207 名月や湯呑みの工面つかぬまま
208 百日紅手向けの供花や妹忌
209 処理水や言葉も出せぬ初秋刀魚
210 鶏頭花図太く生きる石割め

211 茄子の花風が訪ねている暑さ
212 西日さすあの日旅立ったあの場所へ
213 琵琶の洲の秋を集めるかいつぶり
214 雲走り月逆走す間に合わぬ
215 放棄地の芒は風に抗いて
216 なれそめは秘密のままよそぞろ寒
217 山の端と住み家を架ける二重虹
218 ろうそくの消える刻まで敬老日
219 身に入むや時に埋もれしこと多き
220 祖父の死の無沙汰を叱る涙かな
221 逆上りの中年が抱く鰯雲
222 秋雨去りコンビニ傘をもてあます
223 我も我もシャインマスカット食す人
224 爽秋や赤いヒールで君を待つ
225 大木の影に苔むし馬貞句碑
226 ユニクロを着せられて立つ案山子たち
227 秋日和歳の数だけひとりじめ
228 秋灯が一人暮らしに強すぎる

（以上）

◆第２回雑詠句会には76人の会員から228作品が寄せられました。この中から10句を選び、11月13日（月）消印有効で事務局にお届けください。消印有効とは郵便事情が悪いので２、３日の猶予があるということです。

◆同封の選句用紙を使うと、どこのコンビニのファックスでも50円で送れます。自宅のファックスでもOKですが、ローラーの吸い込みが悪く二枚に及ぶことが多発しています。販売店等に相談してメンテナンスをよろしくお願いします。

◆締切は自薦作品と同じです。自薦作品の応募要項は本誌４ページをご参照ください。

◆「雑詠句会、自薦作品とは何か、どこがどう違うのか」という質問が新会員から寄せられました。募集の時期が違うだけで、同じものです。ただし雑詠句会は三句募集、自薦作品は四句募集です。できるだけ当季雑詠（募集の頃の季節のものなら何でも可）でお願いします。

◆新会員も遠慮せずに、どしどし応募ください。当協会では会員全員に作品、選句・選評のチャンスを提供します。数ヶ月に一度のこれらのチャンスを活かせば、総合的な俳句力は必ず上達します。選評はハードルが高いという声もありますが、思いきって選評を書くことで、俳句の理解力は格段に増します。心で分かるだけでなく「人目にさらす」ことが決定的に重要です。

◆年二回の雑詠句会と年一回の自薦作品は、当協会の日常活動ですので参加料は要りません。

◆俳句初心者は、初心者らしい俳句を作りますし、初心者が選びがちな作品を選句します。これは悪いことではなく、むしろ必要なことで、上達の過程にある正しい発展の状態と言えます。この時代を軽視し、地に足のつかない格好だけの作品を作っていると、いつまでも初心者から抜け出せません。下手な俳句と下手な選句・選評は初心者の頃だけの大切な特権です。

◆この状態を抜け出す有益な方法は、９月30日の「協会勉強会」でも触れましたが、協会の中に信頼できる選者や、目標とする先輩を見つけることです。自身の自信作や、感動して選句した作品を、その意中の人はどう評価しているのかを調べてください。系統的に調べる習慣を持てば、多くのことが見えてきます。

◆最後に事務局の有効利用について提案します。事務局は会員と本協会とを結ぶ窓口ですので、協会の中で生じたさまざまな問題や疑問点を遠慮なくご相談ください。「似たような作品だと思うのに、自分の俳句だけ点が入らないのはなぜか」「自分が素晴らしいと思って選んだ作品を、選者の先生方はなぜ選ばないのか」「選者の評価の高いこの作品の意味がさっぱり分からない」等々、人に聞きにくいことでも大丈夫です。必ずお返事いたしますし、秘密は厳守します。万一返事が遅いと感じたときは、催促してください。見落としの可能性があります。

大分県現代俳句協会
OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION
会長　有村王志
《事務局》
〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436
足立　攝方
TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481
URL:http://www.gendaihaiku.net
E-Mail: info@gendaihaiku.net